田舎に雅言の残れること（玉勝間）

本居宣長

要旨

田舎には昔の言葉が残っている。それらを広く集めるとおもしろい。肥後の人が「見える」を「見ゆる」などと言うので尋ねると、卑しいきこりなどはそう言い、気取った人は「見える」などと言うと答えた。どの国でも山村には古語が残るが、町は都の影響で現代風の言葉になっている。別の肥後の人が、今「ひきがえる」を「たんがく」と言うのは、古語「たにぐく」のなまりと推測したが、本当であろう。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～一〇八・６〈多からん。〉	田舎には古い時代の言葉が残っている。特に遠国の人の言葉はおもしろく、そういう言葉を広く集めると、どんなにか興味深いことだろう。
第二	一〇八・７〈近きころ〉～一〇九・３〈心得たるなめり。〉	肥後の人が「見える」を「見ゆる」などと言うので、優雅な言葉と思って尋ねると、卑しいきこりなどはそう言い、気取った人は「見える」などと言うと答えた。「見える」は現代風の言い方なのに、それをいいと思っているのであろう。
第三	一〇九・４〈いづれの国〉～一〇九・８〈ゆくめる。〉	どの国でも、卑しい者の言葉は、なまりながらも昔の言葉を伝えているが、町は都の人の影響を受けて現代風の卑しい言葉になっている。
第四	一〇九・９〈まことや〉～終わり	別の肥後の人が、今、肥後で「ひきがえる」を「たんがく」と言うのは、古語の「たにぐく」のなまりと推測したが、本当であろう。この類のこと、また触れよう。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①すべて　田舎　に　は、　いにしへ　の　言　の　残れ　る　こと　多し。　②ことに　遠き　国人　の　言ふ　言　の　中　に　は、　おもしろき　ことども　ぞ　まじれ　る。　③おのれ　年ごろ　心　を　つけ　て、　遠き　国人　の　とぶらひ来　たる　に　は、　必ず　その　国　の　言葉　を　問ひ聞き　も　し、　その　人　の　言ふ　言　を　も、　心　とどめ　て　聞き　聞き集め　なば、　いかに　おもしろき　こと　多から　ん。　④近き　ころ、　肥後　の　国人　の　来　たる　が、　言ふ　こと　を　聞け　ば、　世　に　「見える」「聞こえる」　など　いふ　類ひ　を、　「見ゆる」「聞こゆる」　など　ぞ　言ふ　なる。　⑤これ　は　今

副　格助・場所　係助・区別　格助・体修　格助・主格　ラ四・已　存・体
副　形ク・終　副　形ク・体　格助・主格　八四・体　格助・体修　格助・場所
係助・区別　形ク・体　係助・強意(係)　ラ四・已　存・体(結)　代　格助・対象
格助・対象　カ下二・用　接助・単接　形ク・体　格助・主格　カ変・用　完・体　格助・対象
係助・区別　副　代　格助・体修　格助・体修　格助・対象　カ四・用　係助・同類　サ変・用
代　格助・体修　格助・主格　八四・体　格助・対象　係助・同類　マ下二・用　接助・単接　カ四・用
係助・同類　サ変・体　接助・逆確　副　形ク・体　形ク・未　推・体
マ下二・用　完・未　接助・順仮　副　格助・体修　格助・対象　形ク・用
形ク・体　④近き　ころ、　肥後　の　国人　の　来　たる　が、　言ふ　こと　を　聞け　ば、　世　に　「見える」「聞こえる」　など　いふ　類ひ　を、　「見ゆる」「聞こゆる」　など　ぞ　言ふ　なる。　⑤これ　は　今
格助・体修　格助・主格　カ変・用　完・体　格助・主格　八四・体　格助・対象　カ四・已　接助・順偶　格助・場所　副助・引用　係助・強意(係)　八四・終　定・体(結)　代　係助・提示
格助・対象　副助・引用　係助・強意(係)　八四・終　定・体(結)　代　係助・提示

①一般的に田舎には、昔の言葉が残っていることが多い。②特に（都から）遠く離れた国の人が話す言葉の中には、興味深いものが交じっている。③私は年来気をつけて、都から遠く離れた国の人が訪ねてきたときには、必ずその国の言葉について質問し、その人が話す言葉をも、心に留めて聞いたりもするが、さらに諸国の言葉を広く聞き集めたならば、どんなにおもしろいことが多いだろう。

④最近、肥後の国の人がやって来たが、その話すことを聞いていると、世間で「見える」「聞こえる」などという類いのことを、「見ゆる」「聞こゆる」などと言うようである。⑤これは今の世の中では絶えてしまって聞かれ

の　世に　は　絶え　て　聞こえ　ぬ、雅び　たる
格助・体修　格助・場所　係助・区別　ヤ下二・用　接助・単接　ヤ下二・未　打・体　バ上二・用　完・体

言葉遣ひ　なる　を、「その　国にて　は、なべて　かく　言ふ
断・体　接助・順理　代　格助・体修　格助・場所　係助・区別　副　副　八四・体

に　や。」　と　問ひ　けれ　ば、「ひたぶる　の　賤、山がつ
断・用　係助・疑問　格助・引用　八四・用　過・已　接助・順偶　形動ナリ・語幹　格助・体修

は　みな、『見ゆる』『聞こゆる』『さゆる』『たゆる』　など　やうに　言ふ
係助・区別　副助・例示　比・用　八四・体

を、少し　言葉　を　も　つくろふ　ほど　の　者　は、多く
接助・逆確　副　格助・対象　係助・同類　八四・体　格助・体修　係助・区別　副

『見える』『聞こえる』　と　やうに　言ふ　なり。」　と　ぞ
格助・引用　比・用　八四・体　断・終　格助・引用　係助・強意(係)

語り　ける。　⑥そ　は　なかなか　今　の　世　の　卑しき
ラ四・用　過・体(結)　代　係助・区別　副　格助・体修　格助・体修　形シク・体

言ひざま　なる　を、なべて　国々　の　人　の　言ふ　から、そ
断・体　接助・逆確　副　格助・体修　格助・主格　八四・体　接助・理由　代

を　よき　こと　と　心得　たる　な　めり。
格助・対象　形ク・体　格助・引用　ア下二・用　完・体　断・体(撥音(無表記))　定・終

⑦いづれ　の　国　にて　も、賤、山がつ　の　言ふ　言　は、
代　格助・体修　格助・場所　係助・同類　格助・主格　八四・体　係助・区別

よこなまり　ながら　も、多く　昔　の　言　を　言ひ伝へ　たる
ラ四・用　接助・逆接　係助・同類　副　格助・体修　格助・対象　八下二・用　存・体

を、人　しげく　にぎはしき　里　など　は、異国人　も
接助・逆確　形ク・用　形シク・体　副助・例示　係助・区別　係助・同類

ない、優雅な言葉遣いなので、「肥後の国では、一般的にこのように言うのでしょうか。」と質問したところ、「全く山中で生活する卑しい者はみな、『見ゆる』『聞こゆる』『さゆる』『たゆる』などのように言うが、少し言葉に気をかけるほどの者は、多くは『見える』『聞こえる』のように言うのです。」と話した。⑥それ（「見える」「聞こえる」など）はかえって今の世の中の俗な言い方なのであるが、ふつう諸国の人が（そう）言うことから、それをよいことと心得たようだ。

⑦いずれの国であっても、山に住む卑しい者が話す言葉は、なまりはあるが、多くは昔の言葉を言い伝えているが、人が密集してにぎわっている里などは、他国の人も入り交じり、都の人なども、折に触れて往来などするうち

入りまじり、都の人など も、ことに触れて来通ひ
ラ四・用　格助・体修　副詞・例示　係助・同類　副　ラ下二・用　接助・単接　八四・用

など する ほど に、おのづから ここかしこ の 言葉 を
副助・例示　サ変・体　格助・時間　副　代　格助・体修　格助・対象

聞きならひ て は、おのれ も 言選りし て、なまさかしき
八四・用　接助・単接　係助・強意　代　係助・同類　サ変・用　接助・単接　形シク・体

今やう に 移りやすく て、昔ざま に 遠く、なかなかに
格助・変化　形ク・用　接助・単接　格助・比基　形ク・用　副

卑しく なん なりもてゆく める。
形シク・用　係助・強意(係)　カ四・終　定・体(結)

⑧まこと や、同じ 肥後の国 の、また の 人 の 言へ
間助・呼掛　形シク・終　格助・同格　副　格助・体修　格助・主格　八四・已

る、「かの国にて、『ひきがへる』といふ ものを、『たんがく』と 言ふ なる は、いにしへ の 『たにぐく』 の よ
完・体　代　格助・体修　格助・場所　格助・引用　八四・体　断・体　係助・提示　格助・体修　格助・対象　格助・体修

こなまり なる べく おぼゆ。」と 語り し は、まことに しか
断・体　推・用　ヤ下二・終　格助・引用　ラ四・用　過・体　係助・提示　副

なる べし。⑨この 類ひ の こと、国々 に なほ 聞け
断・体　推・終　代　格助・体修　格助・場所　副　カ四・已

る こと 多かる を、今 は ふと 思ひ出で たる こと を
存・体　形ク・体　接助・逆確　係助・提示　副　夕下二・用　完・体　格助・対象

言ふ なり。⑩なほ 思ひ出で ん まま に、また も 言ふ べし。
八四・体　断・終　副　ダ下二・未　婉・体　格助・状態　副　係助・同類　八四・終　意・終

に、（そういう里の人々は）自然とあちらこちらの言葉を聞き習っては、自分も言葉を選んで、なまじ賢そうな現代風に移りやすく、昔風から遠くなり、かえって卑しくなっていくようだ。

⑧そうそう、同じ肥後の国の人で、別の人が言ったことだが、「その（肥後）の国で、『ひきがへる』というものを、『たんがく』と言うのだが、それは、昔の『たにぐく』のなまりであろうと思われる。」と話したのは、本当にそうであろう。⑨このようなことは、諸国でもっと聞いていることは多いが、今ふっと思い出したことを言うのである。⑩さらに思い出すままに、また言おう。

学習活動のポイント

■展開

学習活動のポイント

❶ 全文を音読する。思判表B(1)ア

❷ 重要古語の意味・用法を確認し、現代語訳する。知技(1)ウ エ・(2)ウ
→「言葉と表現」1・2

❸ 全体を要約し、作者の言う「雅びたる言葉遣ひ」とはどういうものかを考える。思判表B(1)イ
→「学習のポイント」1

❶論の展開に注意して、ゆっくり音読させる。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷補うところを括弧内に入れさせるなどして、訳はできるだけ正確を期させる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸「見ゆる」などのように、古代の形を残している語を「雅びたる」と言っていることを読み取らせる。

【評価】作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノートにまとめさせることにより、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶ なぜ田舎には古語が残っているのか、また、それがどのように新しい言葉に置き換えられていくのかを考える。知技(1) ア・(2)エ 主態
→「言語活動」1

❶都会で使っていることばなどを聞いて、その方が良いと思い古い言葉を捨ててしまうということは、現代日本語でも同様のことが起こっていることを考えさせる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・進んで時間の経過や地域による言葉の変化についての作者の考察を理解し、学習課題に沿って、作者の地方に残る言葉に対する感じ方・考え方についてどのように思うかを話し合っているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●一〇八ページ

問 **「おもしろきことども」（3行目）とは、どのようなことを指すか、本文中から抜き出せ。**

答 「いにしへの言」（2行目）

問 **「国々の言葉どもをあまねく…多からん」（5行目）と述べるのはなぜか。**

答 諸国の方言から、昔の言葉がどのようなものであったかを知ることができるから。

問 **「雅びたる言葉遣ひ」（9行目）と反対の意味を示す言葉を本文中から十字程度で抜き出せ。**

答 「今の世の卑しき言ひざま」（一〇九・2行目）

問 **◉「少し言葉をもつくろふほどの者」（11行目）とは、どのような場所に暮らす人々か。**

答 様々な国の人が行き交い、密集してにぎわっている里に住む人々。

補 「つくろふ」は、体裁を考えて取り繕う意。「ほど」は身分・生活環境の範囲などの程度を表す。「ひたぶるの賤、山がつ」に対する人で、田舎弁で話すことを嫌い、現代風の言葉を使おうとする者である。

●一〇九ページ

問 **「そをよきことと」（2行目）の「そ」は**推定の助動詞の連体形。上の係助詞「ぞ」を受けて連体形で結ぶ。肥後の国の人が発音して聞き取ったことを基にして推定している気持ちを表している。

8こは 「これは」。「こ」は「見ゆる」「聞こゆる」を指す。

10ひたぶるの 全くの。

10賤、山がつ 賤は「卑しい」、山がつは猟師やきこりなど、「山中で生活する者」の意。「しづが山がつ」とも言う。

11さゆる 「冴える」。下二段活用動詞「さゆ」の連体形。

11たゆる 「絶える」。下二段活用動詞「たゆ」の連体形。

●一〇九ページ

1そは 「それは」。「そ」は「見える」「聞こえる」を指す。

4よこなまりながらも 「（言葉や発音を崩して）なまりはあるが」。「よこなまり」は、ここでは ラ行四段活用動詞連用形であることに注意。「よこ」は「なまり」に不正の意を添える。

5言ひ伝へたるを 「言い伝えているが」。「たる」は存続の助動詞「たり」の連体形。「を」は逆接の接続助詞。

6ことに触れて…… 折に触れて、機会があ

語句の研究

●一〇八ページ

1雅言 優雅な言葉。宣長は「見ゆる」「聞こゆる」などを「今の世には絶えて聞こえぬ、雅びたる言葉遣ひ」としている。

2遠き国人 田舎（都から離れた地方）のなかでも、とりわけ遠い地方の人。

5なほ国々の言葉どもを 「さらに諸国の言葉を」。「ども」は複数を表す接尾語。諸国の言葉とは、それぞれの地方で使われている方言のこと。

7肥後の国人 肥後は現在の熊本県。ここでは「遠き国人」の例としてとらえられる。

7来たるが 「が」は、単に上の句と下の句とを結び付ける接続助詞。

7世に「見える」「聞こえる」… 「見える」「聞こえる」は、ともに下一段活用の動詞。「見ゆる」「聞こゆる」は、ともにヤ行下二段活用の動詞「見ゆ」「聞こゆ」の連体形。宣長を取り巻く環境では、本来は下二段活用の動詞が、下一段化していたのである。一方の肥後の国では、連体形で止めることはあるものの、まだ、下二段活用が残っているのである。

8言ふなる 「言うようである」。「なる」は

どのようなことであるか。

答 「見ゆる」「聞こゆる」などという言葉を「見える」「聞こえる」と言うこと。

問 **「人しげくにぎははしき里など」（5行目）では、人々の話す言葉はどのようなものになるか、その理由もあわせて述べよ。**

答 様々な国の人の言葉が交わされる場所であるために、そのような里に住む人は、中途半端に賢そうな現代風の言葉を選んで話すようになり、昔の雅びな言葉とはかけ離れた卑しい言葉になる。

問 **「まことにしかなるべし。」（11行目）の「しか」はどのようなことを指すか、説明せよ。**

答 肥後国の人が「ひきがえる」のことを「たんがく」と言うのは、かつて「ひきがえる」を「たにぐく」と言っていて、それが訛ったものであるということ。

問 **◉「この類ひのこと」（11行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 肥後の国で「ひきがえる」のことを「たんがく」と言うが、これは「ひきがえる」の古語「たにぐく」がなまって伝えられたものと考えられるように、古語もしくは古語のなまりを伝えていると分かるような言葉のこと。

ることに行ったり来たりするうちに。ここでは、多様な地域からの人々の往来が、多様なことばの往来でもあることを述べている。

7言選り　言葉を選ぶこと。ここでは、あちこちの言葉を聞き覚え、自分でも言葉を選んで使うことを言っている。

7なまさかしき今やう　「なまさかしき」の「なま」は「中途半端に」の意。「さかし」は才知があり賢いという意味と、小ざかしいという意味がある。ここでは後者と解する。「今やう」（今様）は今の世、あるいは今風・現代風の意。後に出てくる「昔ざま」に対する語。

9まことや　「ああ、そうそう」。物事を思い出すときに発する言葉。「や」は感動を表す終助詞。

10たにぐく　ひきがえるの古語。「ここに多迩具久（タニグク）まをしつらく」（「古事記」上）、「山彦の　応へむ極み　谷潜（たにぐく）の　さ渡る極み」（「万葉集」巻六）など上代文献に出てくる語。「たにくぐり」から発生したという語源説がある。

10よこなまりなるべくおぼゆ　「なまりだろうと思われる」。「よこなまり」は、ここでは四段活用動詞の連用形が名詞化したもので、動詞ではない。「なる」は断定の助動詞の連体形。「べく」は推量の助動詞の連用形。

鑑賞

本章は言葉の問題を述べている一条である。言葉は時代とともに変化していく。その変化ということについてなら、早くに兼好法師が「徒然草」二十二段で、何事も古き世が慕わしいと主張し、その例として、古くは「車もたげよ」と言ったのを今は「もてあげよ」と言うなどと、言葉の変化を取り上げている。また、地方によって使用する言葉の違いがあるということを認識するという、いわゆる方言のことに関しては、貞門俳人の安原貞室が「かたこと」で、京都と田舎との対比という大まかなものではあるものの、言葉を正す意識のもとで違いを指摘している。宣長の時代には、俳人の越谷吾山が安永四（一七七五）年に「物類称呼」を出版している。「部門別に配列した全国方言辞書」（「日本古典文学大辞典」）と、現在でも高く評価されている、本格的な方言の本なのである。

ところが、宣長は、言葉の変化と方言とを結び付けるという新しい見解を打ち出した。古い時代の優雅な言葉が、若干の違いはあっても地方に残っていて、そういう言葉を広く採集するとおもしろいとまで述べている。古文献を熟読し、古語について卓越した識見を有する宣長なればこその発言であるが、書物にまとめるまでには至らなかったようである。

本章では、地方の言葉が内包するおもしろさを披瀝しているだけであるが、実は習俗・儀礼などでも、言葉と同様に地方に古いものが伝えられていると考えていた（「玉勝間」八の巻「田舎に古へのわざの残れること」）。こうなると、近代以降に発達した柳田国男の民俗学との間に大した距離はない。残念なことに、こうした学問は宣長の中では発展しなかったが、方言の問題といい、その発想の新しさに驚かされる。参考までに「田舎に古へのわざの残れること」の本文を次に掲げる。

参考

詞のみにもあらず、よろづのしわざにも、かたゐなかには、いにしへざまの、みやびたることの、のこれるたぐひ多し。さるを例のなまさかしき心ある者の、立ちまじりては、かへりてをこがましくおぼえて、あらたむるから、いづこにも、やうやうにふるき事のうせゆくは、いとくちをしきわざ也。葬礼（はふりわざ）・婚礼（とつぎわざ）など、ことに田舎には、ふるくおもしろきこと多し。すべてかかるたぐひの事共をも、国々のやうを、海づら山がくれの里里まで、あまねく尋ね、聞きあつめて、物にもしるしおかまほしきわざ也。葬（はふり）・祭などのわざ、後の世の物しり人の、考へ定めたるは、中々にからごころのさかしらのみ、多くまじりて、ふさはしからず、うるさしかし。